

松木 星陵（まつき・せいりょう）

1、プロフィール

河東碧梧桐の新聞「日本」「日本及日本人」で活躍、前後して地元俳誌「渋茶」そして荻原井泉水系の層雲弘前支部への参加など、地縁に従ったが、才能の未完が惜まれる。

<生没>

1879(明治12)年4月2日 ~ 1928(昭和3)年4月10日

<代表作>

『松木星陵遺句集』

<青森との関わり>

弘前市に生まれる。家業に従事しながら、日本派ないし新傾向の先進的句境に達していた。

2、作家解説

俳人。明治12年弘前市徳田町の佐藤家に生まれた。本名は淳一。青森県尋常中学校(現弘前高校)に入学、31年卒業後、大阪高等工業に入学。35年同校卒業後、松森町の松木家の養嗣子となり、生涯酒造業に従う。中学時代から「日本」俳壇に投句、ついで40年から5年間「日本及日本人」俳壇に明確なイメージの写生句で頭角を現し「続春夏秋冬」「日本俳句鈔」などの句集にも入集した。この間河東碧梧桐の選をうけて新傾向俳句に向かう傾向をみせる。40年に革新をめざし俳句行脚を行った碧梧桐が来弘した時の良き理解者であった。その時の紀行文『三千里』には彼の句が8句載っている。弘前俳人はしばらく若い彼が俳壇の星陵であることを知らなかった。

41年地元の竹内竹童、柳田柳子らのおこした渋茶会から俳誌「渋茶」が創刊され、彼もこれに参加した。しかし出句数は多くはなく、例会出席も少なかった。同

誌が、春・夏・秋・冬の号を出して終刊すると、彼は再び碧梧桐選の「日本及日本人」への投句に努めるようになる。

44年荻原井泉水は碧梧桐を載いて「層雲」を創刊したが、季題問題での対立のため、途中で碧梧桐が去っていった大正元年井泉水が来弘し、自説を唱道すると、弘前俳人は多く同派に転じた。大正6年層雲支部(群青社)ができると彼も所属したが、「層雲」への出句は無く、例会出席、出句にとどまった。このため、遺句集のため選句を依頼された井泉水は句作を絶ったものと思っていたが、長年の作品を記した俳句帖を見、その俳道継続に感嘆した。彼の遺句集の自由律句120は、定型を脱したといっても井泉水流の長律や滑らかなリズムは無く、碧派的格調を残すかに見える。昭和3年4月10日、49歳の若さで没した。翌年刊行した遺句集に寄せた追悼文には、実業専心のための文才の未完を惜しむ声が多い。しかし、明治40年代の碧派的な格調を有する俳句は県俳壇に一時代を画するものである。

3、資料紹介

○『松木星陵遺句集』

図書

1929(昭和4)年8月1日

190mm×132mm

昭和4年8月1日発行、編集兼発行人は竹内助七(弘前市大字植田町41)。俳句417句の他に、星陵小伝、井泉水の序、後半は付録として、追悼句、追悼会の記、友人の追悼文を収めている。成田夜雨の文の中には、連句6章が引用されている。